

「農事組合法人 林ライス」の設立と今後の展望について
Establishment and Prospects of Hayashi Rice Agricultural Cooperative

田村 善洋
TAMURA Yoshihiro



図-1 林ライスの位置

1. はじめに

宮城県岩沼市林地区は、平成23年3月11日東日本大震災の津波により、農地はもとより農業用機械や施設、住家まで生活基盤全てが流失した。離農を希望する人も多かったなかで、今後の営農について、地域で話し合いを行い、地域の受け皿として法人化を進めた。本報では、「農事組合法人 林ライス」（以下、「林ライス」という。）の設立の経緯や今後の展望について報告する。

2. 設立の経緯

津波により地域全体が被災し、離農する人が多い中で、地域の担い手を確保するため地域の中で話し合いが重ねられてきた。

以前から交流のあった私を含めた同級生3人や同世代2人は、専業・兼業農家であり協業の経験はなかったが、農地の復旧が終わり営農再開を目前にして、地域の受け皿としての体制を迅速につくりあげる必要があると感じていた。

「今60才、あと10年は頑張れる。自分達がかんとかしなければならぬ。」そんな思いから、岩沼市等の支援を受けながら、平成25年2月18日、林ライスを設立した（現在は、代表理事1名、理事3名、幹事2名で構成）（写真-1）。

3. 経営概要

東日本大震災復興交付金（被災地域農業復興総合支援事業）を活用し、岩沼市が、ライスセンター1棟、育苗パイプハウス12棟、施設園芸ハウス1棟を、機械はトラクター5台、田植え機2台、コンバイン3台を導入し、これらを岩沼市から借り受けて使用している（写真-2）。

林ライスでは、75ha規模の営農を目標としており、平成26年度は67ha（水稲52ha（うち直播7ha）、大豆12ha、露地野菜（キャベツ、ハクサイ、ブロッコリー等）3ha）を作付し、平成27年度は区画整理工事のため作付できる面積が調整されたため39ha（水稲25ha、大豆11ha、露地野菜（キャベツ、



写真-1 林ライスのメンバー



写真-2 主要施設(上)・機械(下)

ブロッコリー、ハウレンソウ等) 3ha) を作付した。今年度は、67ha (水稲 50ha (うち直播 9ha)、大豆 15ha、露地野菜 (キャベツ、ハウレンソウ) 2ha) の作付を予定している。

4. 「新たな標準区画 (2ha 区画)」への対応について

宮城県では我が岩沼地区において「新たな標準区画 (2ha)」の取組を行っており、林ライスでは、地域農家の代表として実証調査に参加している。

平成 27 年度は、平成 27 年春に完成した実証圃場で、移植栽培により 2ha 圃場を 2 枚、1ha 圃場を 2 枚、計 6ha で作付けた (写真-3)。

2ha 圃場は長辺長が 200m あるため、「不陸等が発生し営農に支障があるのでは」と不安があった。実際には、不陸の発生や走行性で特に問題はなく、旋回する回数が半分に減ったことから作業効率が大変良かったと感じられた。また、排水路が管路化されたことで、水管理や草刈の労力も大幅に軽減され、秋には無事、収穫作業を終えることができた。

平成 28 年度は、更に大きな 6ha 圃場での営農に取り組んでいる。この圃場では、農研機構東北農業研究センターの協力を得て、グレーンドリルで乾田直播作業を行った。

これまで想像もできなかった大きな圃場での営農について、実証調査によりどのような結果が得られるのか期待している (写真-4)。

このほか、移植栽培とV溝直播により、それぞれ 2ha と 1ha の圃場でも実証調査を行っている。

5. 今後の展望

安定的かつ持続的な農業経営を行っていくことはもとより、林ライスは、構成員の年齢層が高いため、後継者の育成が急務と考えている。また、キャベツ等、作業員の負担が少ない園芸品目を導入して、周年雇用ができる体制を作り、いずれは、地域を担う存在として貢献できるような組織になりたいと考えている (写真-5)。

6. おわりに

震災以降、機械の手当て、農地集積等を岩沼市が積極的に地域に働きかけたことにより、複数の法人が新たに立ち上がり、全てにおいて強力に支援していただいたおかげで現在に至っている。また、法人の設立・運営にご協力いただいた関係者の皆様にこの場を借りて感謝する。



写真-3 2ha 圃場での稲刈作業



写真-4 6ha 圃場でのグレーンドリル直播作業



写真-5 キャベツ収穫作業